



第2章 春日部市の状況



第1節 人口、産業

本市の総人口は、平成27年の237,214人から令和2年は233,841人（男性116,029人、女性117,812人）と微減しています。一方、世帯数は平成23年の99,409世帯から年次的に増加し、令和2年の時点で107,354世帯です。

神明貝塚が位置する西親野井地区の総人口は、159人（男性88人、女性71人）、世帯数は64世帯です。

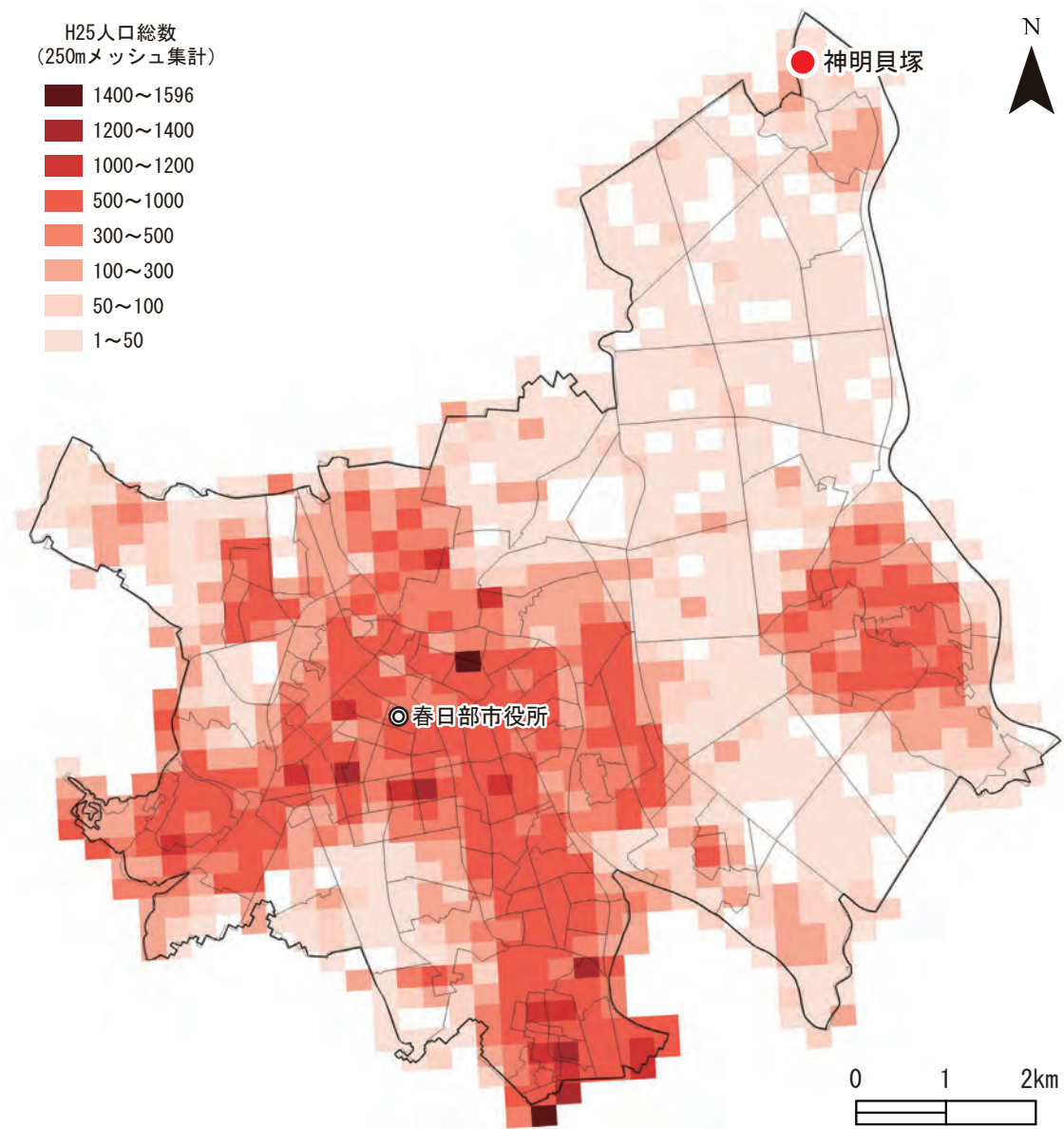


図6 春日部市の人口分布

(e-stat 政府統計の総合窓口「国勢調査 250m メッシュ」データより作成)

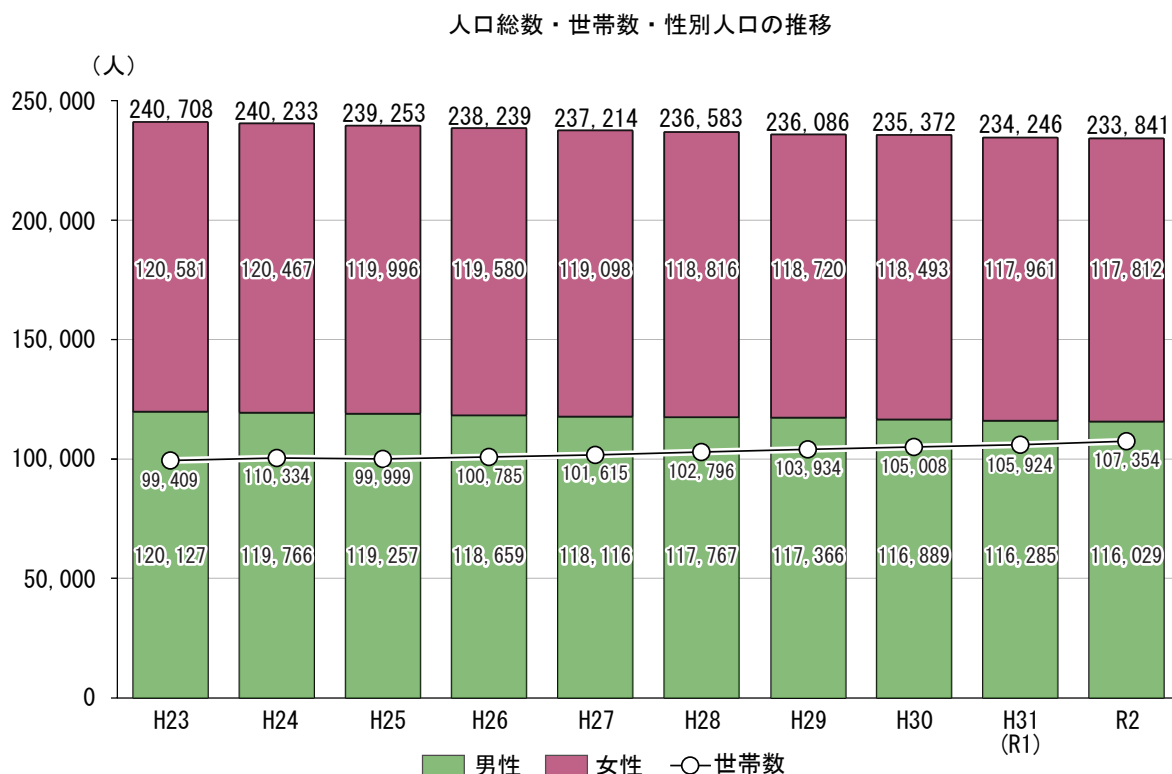


図7 春日部市の人口変化
(春日部市 HP「人口統計」データより作成)

本市の産業は、農業では平成27年の農家数は1,305戸、就業人口は1,908人です。製造業では、平成30年の事業所数が215カ所、従業者数が6,467人です。商業では、平成26年の商店数は1,430店、従業者数は12,040人で、就業者数の割合では70%を占めます。工業製造品出荷額と年間商品販売額は増加傾向です。

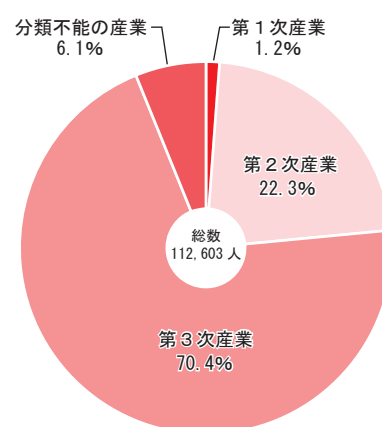


図8 産業別就業者数の割合
(データ出典：国勢調査)

第2節 地勢、交通

平成17年に春日部市と庄和町が合併し、現在の春日部市が誕生しました。規模は南北約12km、東西約11km、総面積は66.00km²です。埼玉県東部、関東平野のほぼ中央に位置し、都心から35km圏内にあります。北は宮代町、杉戸町、南は越谷市、松伏町、西はさいたま市、白岡市、東は江戸川を挟んで千葉県野田市と接しています。



主な公共交通は、市域を南北に走る東武伊勢崎線（東武スカイツリーライン）や、東西に走る東武野田線（東武アーバンパークライン）のほか、路線バスが10路線、市運営のコミュニティバスが6路線運行しています。主要な道路は、東西方向に国道16号、南北方向に国道4号、4号バイパスが通ります。

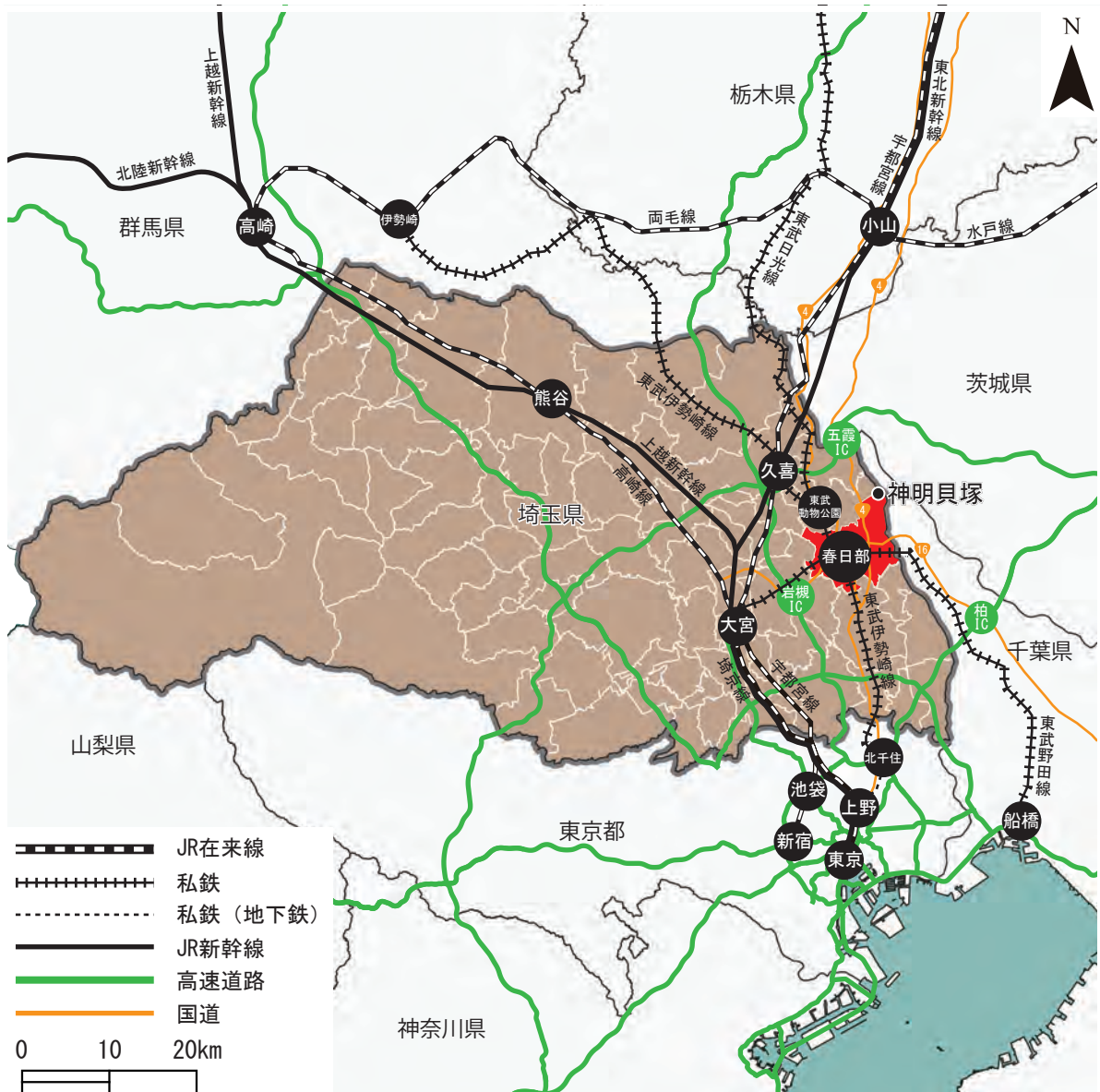


図9 春日部市までの主要交通網

第3節 地形、地質

本市の地形は主に台地と低地に大別され、大部分は中川低地に位置します。北西部と西部には大宮台地、北東部と南東部には下総台地が樹枝状に広がっており、台地の標高は8～16mを測ります。



1. 台地

約 12.5 万年前の間氷期に下末吉海進と呼ばれる大規模な海進が生じ、市域は古東京湾と呼ばれる海でした。その後、氷期によって海退に転じ、最終氷期には海水面が約 140m 低下して、古東京湾は陸地化しました。陸地では古渡良瀬川の浸食によって下刻が進み、西側に大宮台地、東側に下総台地が形成されました。

大宮台地は関東平野中部に位置する島嶼状の地形であり、下末吉面と武蔵野面に分かれます。河川の開析によって、大宮台地本体から分離した慈恩寺支台が本市の西部に所在します。

下総台地は、千葉県北部一帯の広大な台地で、下末吉面と武蔵野面に相当します。近世の江戸川開削により台地の一部が分断され、本市の北東部には宝珠花支台、南東部には金杉支台が所在します。神明貝塚は宝珠花支台に形成され、中川低地から北方に向かって伸びる開析谷の最奥部西側に立地しています。

2. 低地

大宮台地と下総台地に挟まれた低地一帯は中川低地と呼ばれており、縄文時代以降、土砂の堆積によって形成された沖積地です。縄文時代早期にあたる約 9,000 年前に、地球全体の温暖化に伴って海面が上昇しはじめ、6,500 年前にピークを迎えました。海面は現在よりも 2 ～ 3m 程度高く、日本列島の各地で海岸線が内陸部まで入り込みました。関東地方では、栃木市付近まで海域が達していたとされ、このうち中川低地に形成された海は奥東京湾と呼ばれています。海面の低下は約 5,300 年前に始まり、約 4,000 年前には、海岸線は現在の草加市付近まで南下し、神明貝塚付近は海水と淡水が混じる汽水域が形成されていたと考えられています。その後、さらに海面が低下し、約 1,800 年前には、海岸線は現在の位置になりました。

現在、中川低地には自然堤防や後背湿地、河畔砂丘がみられます。自然堤防は洪水により川の両岸に土砂が堆積した微高地で、中川流域では小規模な島状ですが、古利根川左岸や古隅田川右岸には大規模に広がっています。また、河畔砂丘は北西の卓越風により運ばれた砂が堆積したもので、埼玉県東部の特徴的な地形です。古利根川左岸や古隅田川右岸で顕著に発達しています。





第4節 気象、植生

昭和56年から平成22年までの年平均気温は15.0℃で、月平均の最高気温は8月の26.9℃、最低気温は1月の4.1℃です。年間降水量は1,328.3mmで、月別では9月が185.9mmと最も多く、次いで10月が175.0mmとなっています。なお、令和元年度の年平均気温は15.8℃、年間降水量は1,536.5mmです。

年間降水量は比較的少ない地域ですが、梅雨や秋雨に加えて台風による影響を受ける年もあります。夏は高温多湿で、冬は乾燥した晴天が続く、太平洋岸に特徴的な気候です。

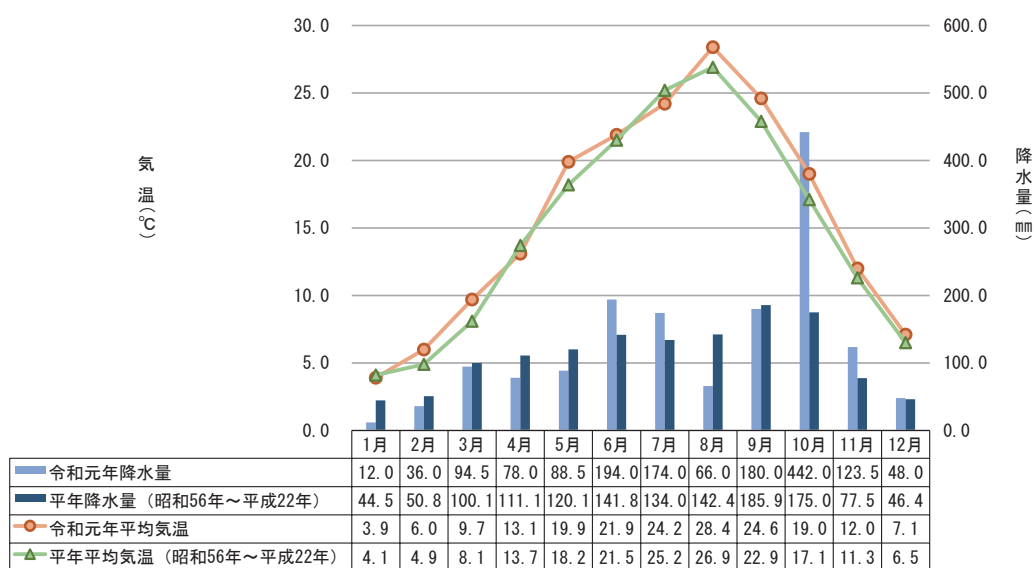


図12 気象データ・気温、降水量（観測地点：越谷）

（気象庁公開データを基に作成）

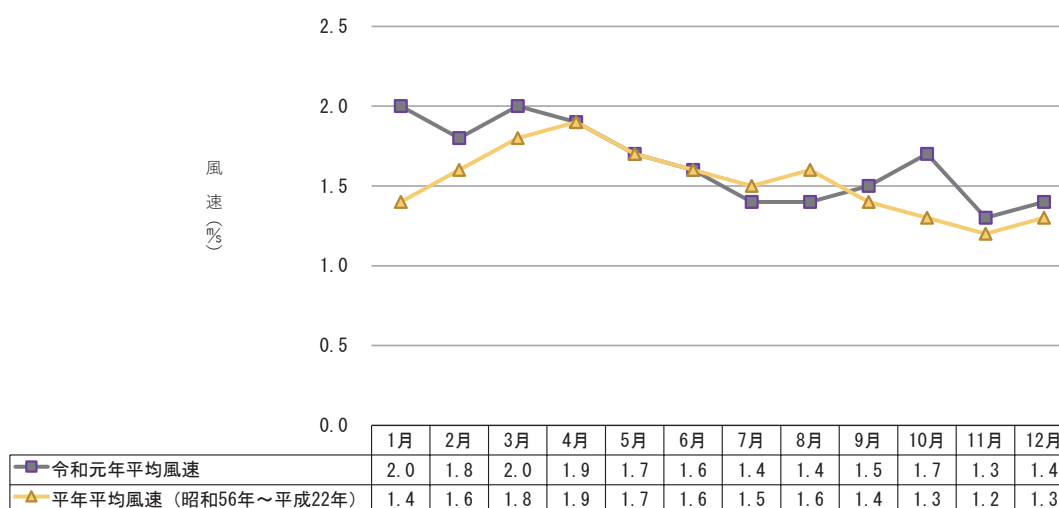


図13 気象データ・風速（観測地点：越谷）

（気象庁公開データを基に作成）



植生については、北西部の台地にクヌギやコナラなどの落葉広葉樹の二次林が分布しており、それ以外では低地に散在する農家住宅の屋敷林や、シイ、カシなどの常緑広葉樹の社寺林が各所に分布しています。

神明貝塚周辺では、水田、畑の雑草群が占めていますが、ボーリング調査の結果、縄文時代前期以降、台地ではコナラが卓越する森林が、低地ではハンノキなどの森林が形成されたと推定されます。

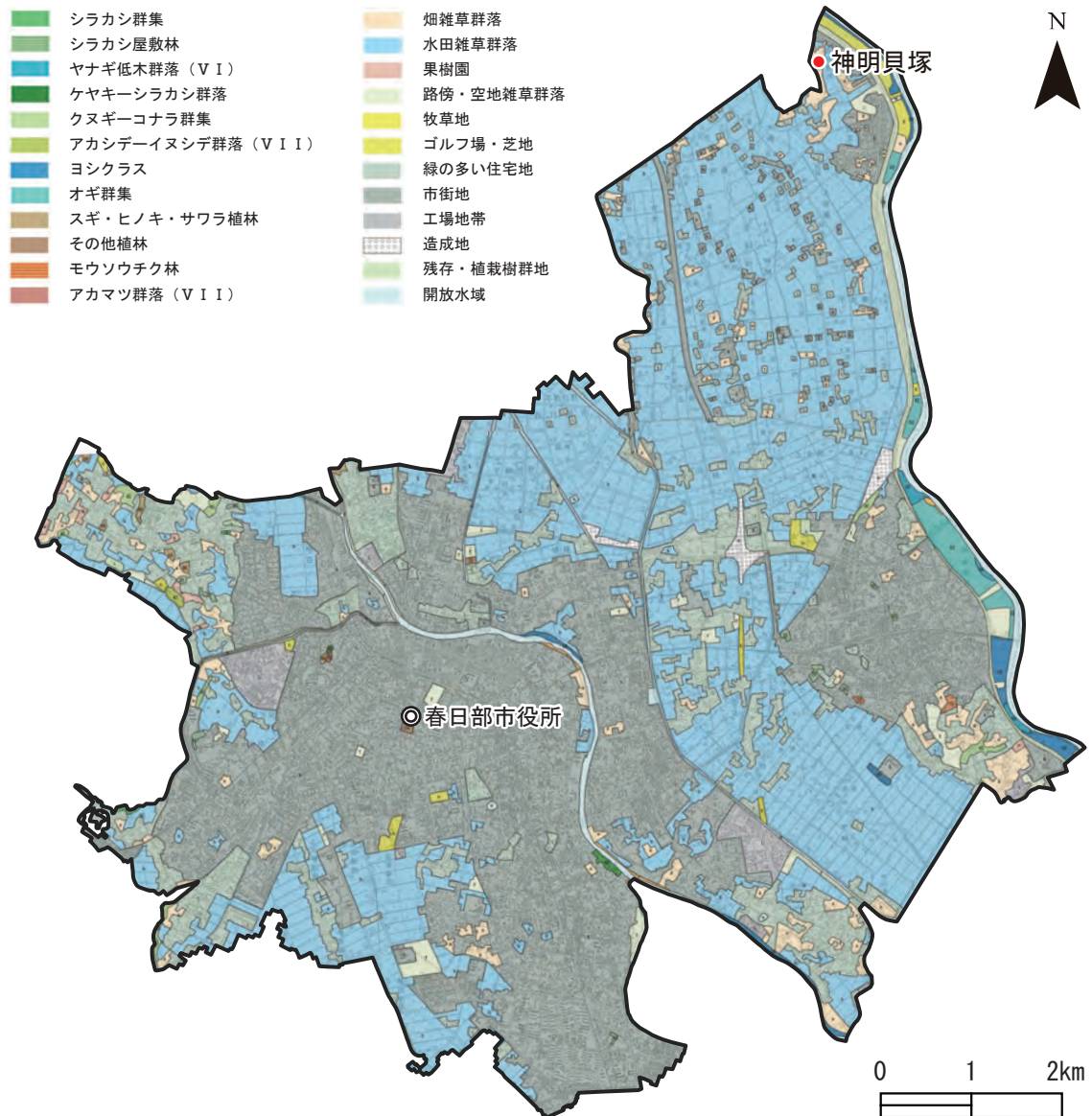


図 14 春日部市の植生分布

(1/25,000 植生図「野田市」「宝珠花」「岩槻」(環境省生物多様性センター)を使用して作成)



第5節 土地利用

1. 春日部市全域

古代から中世の人々の居住域は、台地や自然堤防上にみられます。戦国時代から近世にかけては、低地での開発が進み、市内の各地に村が成立し、近代には、灌漑や土地改良のための耕地整理が行われました。高度経済成長期以降、人口増加や産業構造、交通網が大きく変わり、田畑は急速に市街地化しました。

現在は、宅地や公共施設が総面積の60%近くを占め、次いで田畑が35%で、市内全域が市民の生活空間です。市内全域が都市計画区域に指定され、市街化区域と市街化調整区域に分かれています。市街化区域には12種類の用途地域が設定されています。

区分		面積 (平成30年)	構成比
田		1,663 ha	25 %
畑		672 ha	10 %
宅地		1,984 ha	30 %
池沼		1 ha	0 %
山林		53 ha	1 %
原野		7 ha	0 %
雑種地	ゴルフ場用地	0 ha	0 %
	遊園地等用地	0 ha	0 %
	鉄軌道用地	36 ha	1 %
	その他	255 ha	4 %
その他(公共施設)		1,929 ha	29 %
総数		6,600 ha	100 %

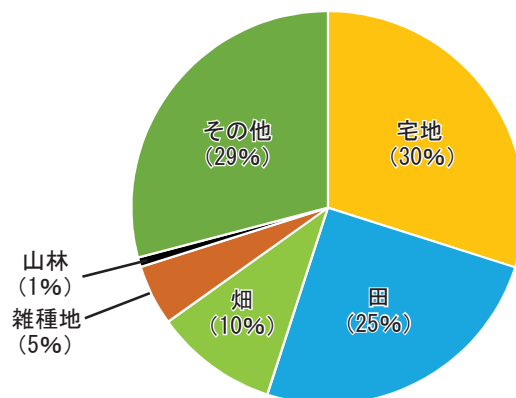


図15 春日部市の地目別面積、構成比

(春日部市2020『令和2年度 春日部の都市計画』 同『春日部市統計書 令和2年版』より)

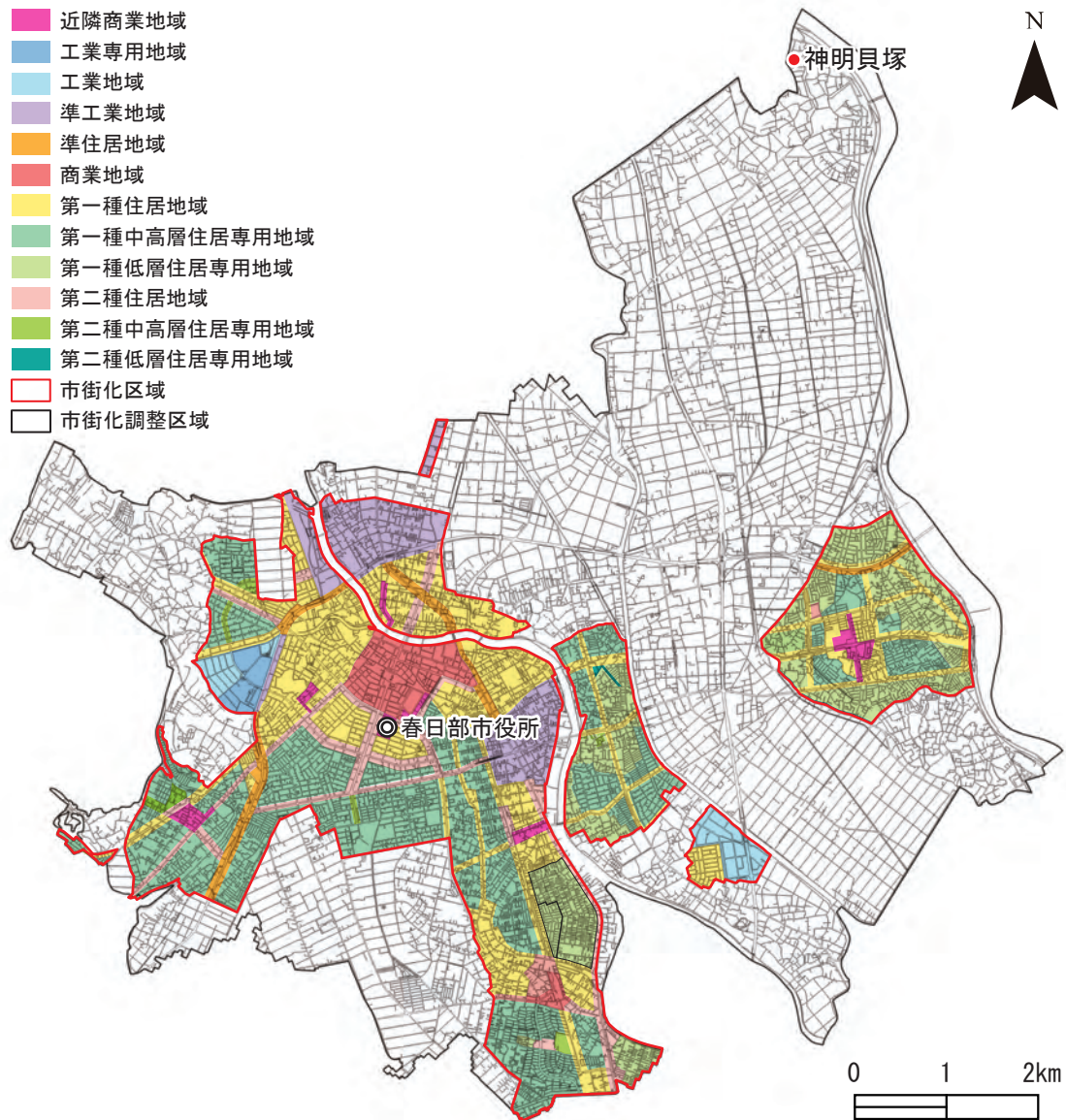


図 16 春日部市の用途地域

(国土数値情報「用途地域（令和元年）」データを加工して作成)

2. 史跡周辺

神明貝塚の所在する西親野井地区は大部分が農地で、一部は宅地として利用されています。また、全域が都市計画法上の市街化調整区域に含まれ、農地は農業振興地域の農用地区域にあたります。なお、春日部市都市計画マスタープランに定める土地利用方針では、西親野井地区が所在する庄和北地域は「農地・緑地保全ゾーン」に位置付けられています。

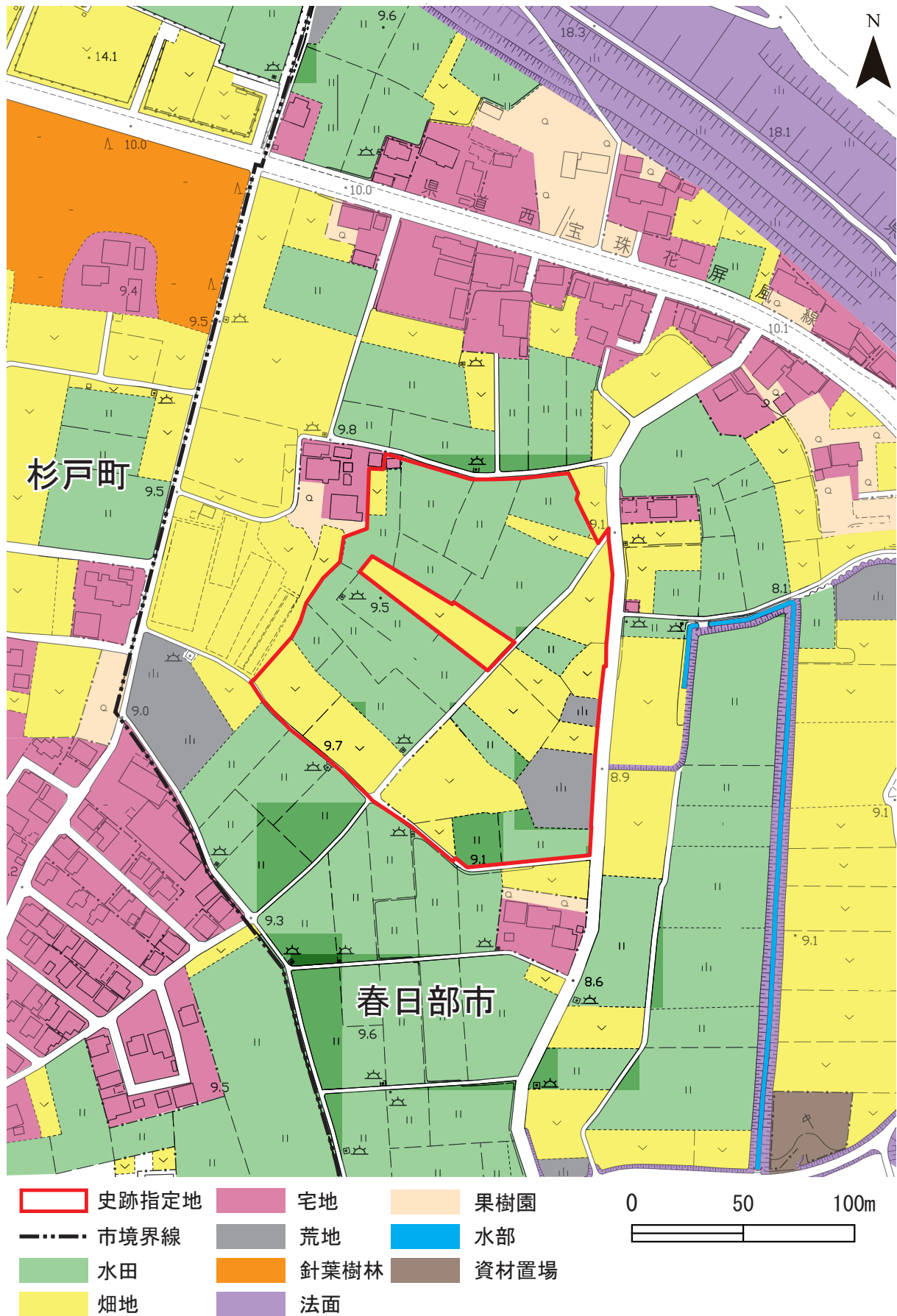


図 17 史跡周辺の土地利用状況

(都市計画図を基に作成)

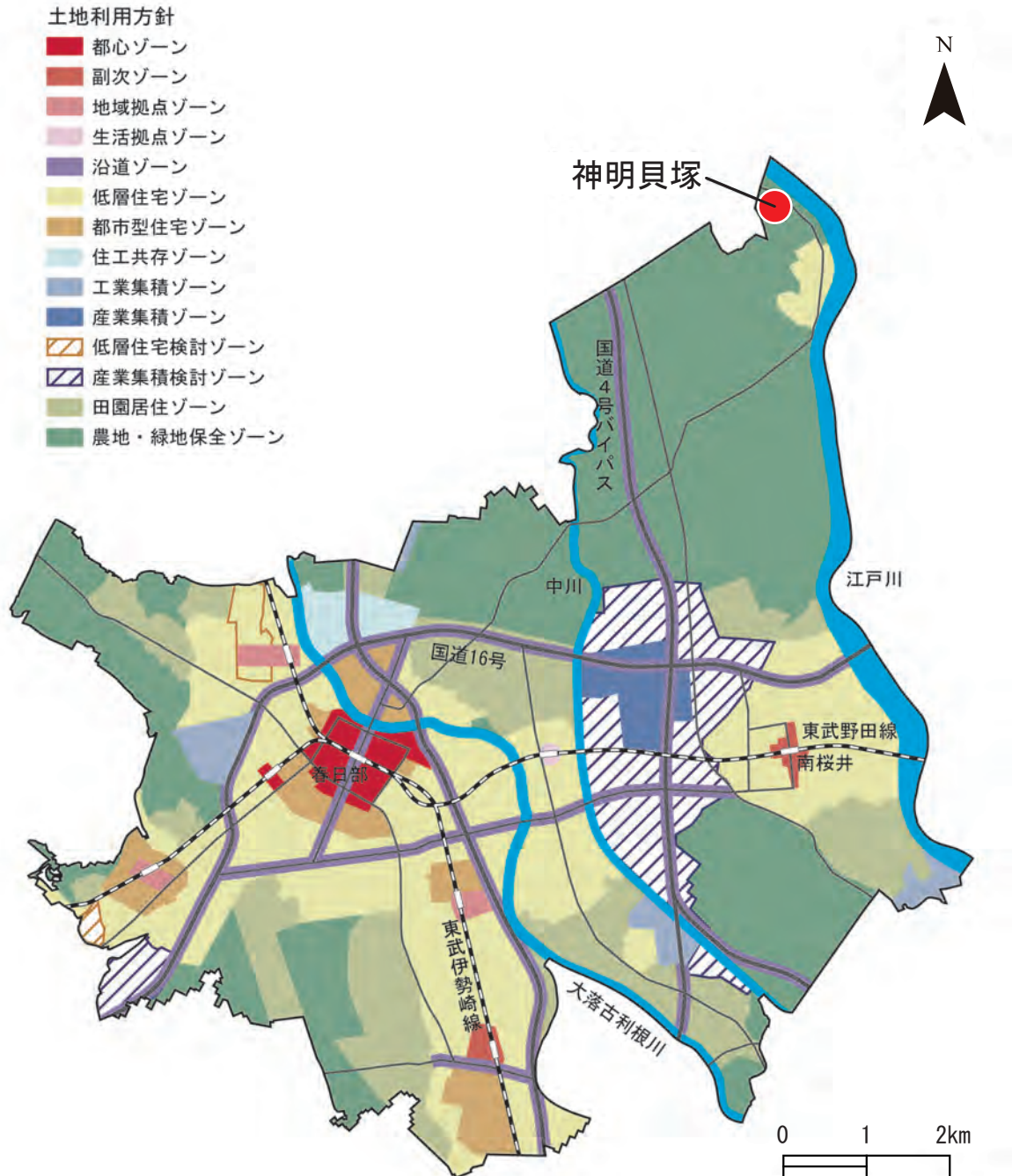


図 18 春日部市の土地利用方針

(春日部市 2018『春日部市都市計画マスタープラン』p.28 の図を一部調整)



第6節 歴史、文化

1. 旧石器時代から古代

神明貝塚周辺では、貝の内遺跡において旧石器時代末期から縄文時代草創期の石器が発掘されています。縄文時代前期には縄文海進がピークを迎え、貝の内遺跡や町道遺跡などで集落が営まれました。縄文時代中期には、海退により貝塚は減少しますが、浅間下遺跡などで集落が確認されています。縄文時代後期の集落は宝珠花支台では神明貝塚が唯一です。縄文時代においては、開析谷開口部の貝の内遺跡から、谷奥部の浅間下遺跡、そして、神明貝塚へと、集落が徐々に内陸へ移っていく様相が確認されています。

弥生時代の集落遺跡は現在のところ確認されていませんが、倉常地区の須釜遺跡では再葬墓から壺形土器などが発掘されています。この壺形土器の表面には稲粳の圧痕が観察されており、稲作が行われていたと推測されます（図20、No.22）。

古墳時代前期については、金杉支台で小規模な集落が数カ所あります。東中野地区に所在する権現山遺跡では、方形周溝墓から底部穿孔壺形土器が多数発掘されました（No.32）。古墳時代後期になると、宝珠花支台では、貝の内遺跡や陣屋遺跡で大規模な集落が営まれ、近隣の杉戸町では、目沼古墳群、木野川古墳群が築造されました。

奈良、平安時代、市域は古利根川筋を境として、西は武蔵国埼玉郡、東は下総国葛飾郡でした。貝の内遺跡では、下総国分寺創建期の軒平瓦や、官人層の存在が推察される遺物が発掘され、拠点的な集落であったことが窺えます。



写真6 須釜遺跡再葬墓出土遺物一括



写真7 貝の内遺跡出土下総国分寺軒平瓦



2. 中世

中世には、市域の西側は武蔵国太田荘、東側は下総国下河辺荘として開発されました。下河辺荘は下河辺氏が開発した荘園で、台地上は「野方」、中川低地は「下方」または「河辺」、新規の開発地は「新方」と呼ばれました。

粕壁地区の浜川戸遺跡は、鎌倉時代末までに形成された河畔砂丘付近にあり、鎌倉幕府の御家人春日部氏の居館跡と推定されています。また、古文書などには、春日部郷、花積郷、金井郷、宝珠花郷などの記載があり、自然堤防や台地に、中世の人々の主要な生活拠点があったと考えられます。市域には、中世に創建、開基された社寺が点在し、延命院木造阿弥陀如来坐像（図20、No.24）や常楽寺の銅像阿弥陀如来坐像（No.17）、大王寺別院の板石塔婆（No.25）、西金野井香取神社の棟札（No.28）などが伝えられています。



写真8 板石塔婆

3. 近世

徳川家康が関東に入部すると、江戸幕府は関東地方の河川整備を進めました。江戸川の開削もその一つで、寛永17年（1640）頃、江戸川は「新利根川」と呼ばれ、一時、利根川の本流となっていました。河川整備により、低地では新田が開発され、各地に村が成立しました。西宝珠花地区の小流寺には、江戸川の開削、流域の新田開発に深く携わった小島庄右衛門正重の墓と、正重の実績を記した小流寺縁起が伝えられています（No.27）。各地の村では、豊作祈願や疫病退散のため、獅子舞やお囃子、神楽などが広まり、今に伝えています。

江戸川では、江戸と北関東を結ぶ舟運が盛んで、西宝珠花、西金野井の両村には河岸場が置かれ、年貢米や農産物、酒、醤油などの地回り物が津出しされました。とりわけ、西宝珠花河岸は河川の関所があった関宿に至る最後の河岸場であり、商家や船頭が休泊する船宿が軒を連ねました。

西宝珠花地区の薬種問屋に伝わる長久記（No.41）には、近世の河岸場の暮らしが克明に記されており、町場として発展した様子が窺えます。現在も続く宝珠花大風揚げ（No.26）は、近世後期に始まり、商家の資本を背景に、明治時代後期には大型化したようです。宝珠花神社扁額（No.26）は、近世後期の不二道の開祖小谷三志の筆跡であり、町場の文化、信仰の一端を伝えています。



写真 9 小流寺縁起



写真 10 宝珠花神社扁額



写真 11 倉常の神楽囃子



写真 12 宝珠花大凧揚げ

4. 近代、現代

明治初頭、江戸川では蒸気船が就航し、西宝珠花、西金野井の両河岸には問屋、回漕店、旅館、料理屋、船宿などが建ち並んでいました。しかし、明治43年（1910）の水害は関東地方に大きな被害を与え、それを契機とした河道拡幅や堤防の新設などの工事により、川舟の積み下ろしに支障が生じました。また、昭和初期には北総鉄道（現東武野田線）の開業や、自動車での運搬が増え、舟運業は次第に影を潜めていきました。

低地では、近世以来、人々は水塚とよばれる盛り土に蔵や主屋などを建て、水害から生命や財産を守ってきました。市内には、明治43年（1910）の水害以後に築かれた水塚が多く残されています。

しかし、昭和22年（1947）のカスリーン台風により、利根川が決壊し、中川低地は再び水没しました。このため、国は江戸川のさらなる拡幅工事を進めます。宝珠花村では被害が少なかったものの、75%にあたる250戸が移転対象となり、大規模な曳家が行われました。西金野井でも江戸川が拡幅され、河岸場の面影はわずかとなりました。

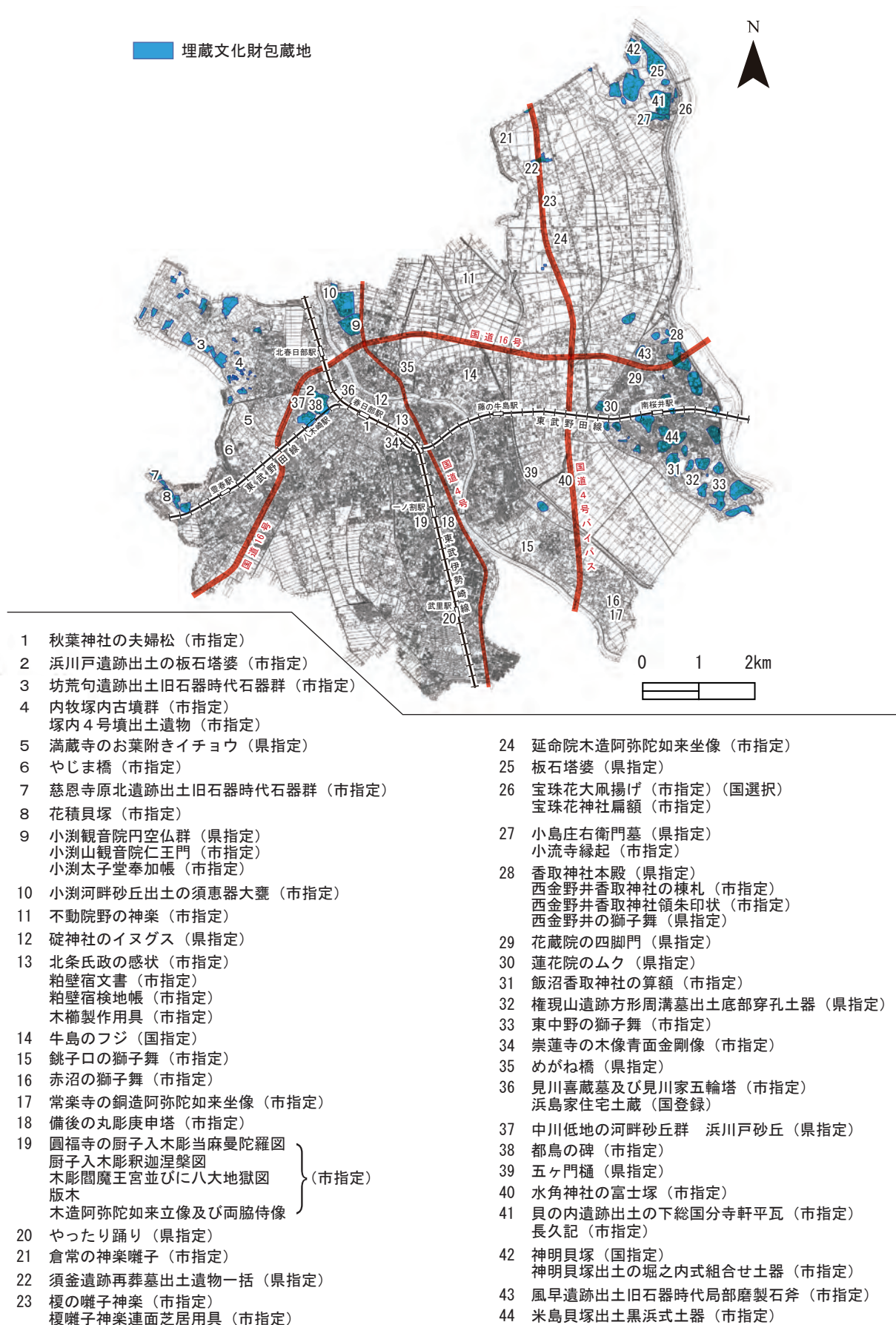


図 20 市域の文化財の位置